

平成 21 年 6 月 9 日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2006～2008

課題番号：18520040

研究課題名（和文） インド密教における carya の文献学的研究

研究課題名（英文） A Philological Study of the Post-initiatory Carya in Indian Tantric Buddhism

研究代表者

種村 隆元（Tanemura Ryugen）

東京大学・大学院人文社会系研究科・助教

研究者番号：90401158

研究成果の概要：本研究では、インド密教の分野で未だ研究がほとんどなされていない、実践者が入門後に課せられる実践（carya）を取り扱っている。研究に際しては、アバヤーカラグプタ著作『教説の穂』に見られる所説の解明を中心に行い、関連文献を精査し、比較することによりアバヤーカラグプタに見られる carya の二面性の問題、そこから浮かび上がってくる、シヴァ教実践の仏教化の一つの過程をおぼろげながらも描き出した。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2006 年度	1,200,000	0	1,200,000
2007 年度	700,000	210,000	910,000
2008 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	2,400,000	360,000	2,760,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学 印度哲学・仏教学

キーワード：インド密教，carya，Abhayakaragupta, Amnayamajari

1. 研究開始当初の背景

密教を含むタントリズムは、インド中世初期に隆盛を見た実践体系の総称であり、マントラや印契などを使用した秘儀的な儀礼、新しいタイプのヨーガなどを特徴としている。このように、実践体系としての側面の強いものであるが、インド密教の分野における研究といえば、その神秘的な思想、あるいはマンダラ等の造形美術などの研究に偏り、しかも日本の真言仏教やチベット仏教からの視点によるものが多かった。申請者がこのテーマを研究題材に取り上げた理由は、インド密教に

おける carya（入門者が入門後に行うことを課せられる苦行的実践）がシヴァ教の実践をモデルにしたものであり、それとの比較研究が将来的に中世初期のインドにおける宗教動向という文脈において、新たにインド密教をとらえ直すための良いサンプルになるのではないかと考えたのである。

2. 研究の目的

本研究は、インド密教の研究において従来ほとんど省みられることのなかった、実践者

が入門儀礼を授かった後に遵守すべき苦行的実践(carya)の一端を、特に『秘密集会タントラ』以降の後期インド密教の関連文献の精査により解明し、未だに不明の部分の多いインド密教の全体像の解明に寄与することを目的としている。

3. 研究の方法

研究の具体的な方法は以下の通りである。

(1) 本研究ではアバヤーカラグプタ著作の『教説の穂 *Amnayamanjari*』をメインテキストとし、その訳注作成を通してcaryaに関する知識を深めることとした。アバヤーカラグプタは11世紀の後半から12世紀初頭にかけて活躍したインド密教(および「顕教」)の学僧であり、彼以前の密教儀礼・実践を整理し、かつ新たに体系化を試みた人物である。『教説の穂』は『サンプトードゥバヴァタントラ *Samputodbhavantra*』に対する注釈書である。『サンプトードゥバヴァタントラ』自体は、先行する様々な著作を剽窃して出来上がった折衷的な経典で、『教説の穂』自体も経典に沿って様々な儀礼に対して注釈を施しており、それだけに密教における一種の百科全書的な性格を持つ。アバヤーカラグプタは儀礼の体系化を試みるだけでなく、そこに浮上する教理的問題点に関して様々な議論を展開している。したがって、先行研究のない当該分野の研究においては、良いスターと地点となり得た。

(2) 第二の点は、(1)と密接に結びついていることであるが、アバヤーカラグプタの議論を正確に理解するためには、関連する文献の読解が必要となってくる。本研究では、『教説の穂』がサンスクリット語原典を欠くため、サンスクリット語原典が存在する文献を優先した。具体的には、『ヘーヴァジラタントラ *Hevajratantra*』に対する、ラトナーカラシャーンティの注釈『真珠鬘』、同タントラに対するカマラナータの注釈『宝鬘』、パドマヴァジラ作『秘密成就』、アナンガヴァジラ作『智慧方便決択成就』等をその対象とした。

4. 研究成果

(1) carya には入門後の実践者を束縛する規則(誓戒)としての側面と、概念的思考を離れるための実践としての側面の二つがある。前者は『ヘーヴァジラタントラ』に対するラトナーカラシャーンティの注釈に見られるcaryaの定義(caryaとは師や仏の命により行いがたい行を行うこと)、後者は同タント

ラに対するカマラナータの注釈の定義(caryaとは身体・言語・心の特殊な活動である)に見られる。アバヤーカラグプタはおそらくこの二面性を十分に了解しており、それ故、一方では『教説の穂』においてカマラナータの定義を借用しつつ、概念的思考を離れるための入門後の実践がcaryaであるとし、また『金剛鬘』という儀軌文献においては、「caryaなしでは菩提心の理解が不可能であることを学習するためにcaryavrata(caryaに関する誓戒)がある」として、caryaのもつ誓戒行としての面をcaryavrataとしてcaryaとは区別して考えていたことが明らかになった。

(2) 『サンプトードゥバヴァタントラ』が様々な著作を剽窃していることは先に述べたとおりである。当該タントラのcarya章(第5.4章)の場合は、そのテキストの多くの部分が『ヘーヴァジラタントラ』の第1.6章(「caryaの詳説」章)に依存していることがすでに指摘されている。この文献的依存はタントラ本体に止まるものではなく、アバヤーカラグプタもその注釈において、多くの部分を『ヘーヴァジラタントラ』の注釈である『真珠鬘』や『宝鬘』に依存していることも、すでにハンブルグ大学のHarunaga Isaacson教授(本研究の研究協力者)により指摘されている。

しかしながら、『教説の穂』の当該章において一番重要なことは、章の末尾において、『秘密集会タントラ』の流派である聖者流の文献である『行集合灯』の第11章から文章を借用し、『行集合灯』の説く三種類のcaryaの分類を導入していることである。三種類のcaryaとは、手の込んだもの(prapanca)、すなわち外的所作を伴う実践(prapanacarya)、外的所作を離れた実践(nisrapancacarya)、外的所作を絶対的に離れた実践(atyantanisrapancacarya)の3種類であり、アバヤーカラグプタは、『サンプトードゥバヴァタントラ』の第5.4章の説くcaryaは、外的所作を絶対的に離れた実践であるとしている。

しかしながら実際には『サンプトードゥバヴァタントラ』第5.4章の説く内容は、シヴァ教のカーパーリ力的な内容が色濃く、入門者が遵守すべき行であり、(1)の定義で言うならば入門者を束縛する誓戒としての意味合いが強い。アバヤーカラグプタは、注釈を通じてこのような誓戒行の内化を図る意図があったと考えられる。

(3) 密教における入門後のcaryaが規定されているおそらく最初の文献は『秘密集会タントラ』系の文献である『秘密成就』である。『秘密成就』の第6章で規定されているのは

「秘密の carya」あるいは「狂人の誓戒」と呼ばれる誓戒行である。「狂人の誓戒」とは、入門者が一定の期間狂人の振りをする実践であるが、シヴァ教の聖典(『ブラフマヤマラ』別名『ピチュマタ』や『ジャヤットラタヤマラ』)にそのモデルが見られるものである。このことは研究協力者であるオックスフォード大学の Alexis Sanderson 教授により、報告者が主催した同教授の講演会¹においてすでに発表されている。『秘密成就』の著者パドマヴァジラはこのようなシヴァ教起源の実践に、「概念的思考を離れるため」という仏教的な意味づけを行っており、先に言及した carya の二面性がすでに最初期の文献から現れていることが確認できる。またこのような誓戒行を実践するのは、独身の苦行者ばかりではなく、在家の行者もこのような実践を行っていたことが『秘密成就』の記述から明らかになっている。

(¹ Alexis Sanderson. The Saiva Model of Post-initiatory carya in the Yogini-tantras. 2006年9月14日。会場：東京大学文学部。)

(4) インド密教で後代強調されてくるのは、先に述べた carya の二面性のうち、概念的思考を離れるための実践としての側面であり、入門者を縛る規則としての側面はあまり強調されていないようである。例えば、『サンヴァローダヤタントラ Samvarodayatantra』の第21章では、シヴァ教のカーパーリカ的な誓戒行、「狂人の誓戒行」、「不動の誓戒行」の3種類を説いているが、シヴァ教の誓戒行をモデルとした二つの実践の上に「不動の誓戒」を置いている。この「不動」は、ラトナラクシタ(アバヤーカラグプタの弟子)の注釈を参照するなば、「心が動かないこと」としており、心の散乱、すなわち概念的思考を避けるための一番上位の実践としている。またジュニャーナシュリーは『金剛乗に関する二つの極端の排除』において、密教の carya は、その安楽的な実践と外的所作を離れた実践故に実践者の心を散乱させることなく、また不浄物の摂取という実践により概念的思考を迅速に離れることができ、この点において非密教の仏教に優ると主張していることが明らかになった。

(5) 本研究の最大の成果は、国内外において未だに数の乏しい carya の研究において、carya のもつ二つの側面とその展開、特に概念的思考を離れるための実践として、シヴァ教をモデルとした実践が仏教的な色付けをされたこと、そしてそれが仏教内部においても、密教が非密教の大乗(いわゆる顕教)よりすぐれている理由の一つとされたことを文献的に確認できた点である。またその最初

のまとまった報告が、日本南アジア学会の英文論文集である International Journal of South Asian Studies で発表されたことで、広く海外の研究者にも目に留まる機会が多くなることが期待される。

(6) 今後の課題については次の点が挙げられるであろう。

まず、carya のもつ二面性であるが、これは carya という語がもつ意味の幅の広さも原因の一つとして考えられる。もともと入門者を縛る規則、あるいは誓戒はサンスクリット語では samaya あるいは vrata などと表現されているが、carya がなぜ samaya と同義として用いられるようになったかという過程も調べていく必要がある。carya という語の意味の広さが、入門後の carya を単に誓戒という意味に留まらず、さまざまな実践を含む広い意味で用いられる要因になっており、それが carya に関する議論を複雑化させている原因となっていると考えるからである。

次にシヴァ教の実践との関係について、シヴァ教の関連文献を考察し、それと比較することにより明らかにする必要がある。パドマヴァジラが『秘密成就』の中において言明している通り、密教の実践者がシヴァ教の文献・儀礼に通じていたことが推測される。今後は、シヴァ教・密教における誓戒行の展開がそれぞれどのように起こったのであるか、そしてそれらの展開には相互にどのような関係があるのか明らかにしていく必要がある。関連の諸分野と同様に、carya についてもシヴァ教と密教の関係についての研究は、まだ始まったばかりなのである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 3 件)

種村隆元。「Samvarodayatantra 第21章 Caryanirdesapatala に関する一考察：Padmini 第21章校訂テキスト並びに註」『密教学研究』41, pp.23-40. 2009年。査読無。

Ryugen Tanemura. Superiority of Vajrayana, Part II: Superiority of the Tantric Practice Taught in the *Vajrayanantadvayanirakarana (rDo rje theg pa'i mtha' gnis sel ba). *Genesis and Development of Tantrism*. Institute of Oriental Culture Special Series 23. Tokyo: Institute of Oriental Culture, University of Tokyo, pp.487-514. 2009年。査読無。

Ryugen Tanemura. Justification for and Classification of the Post-initiatory Carya in Later Tantric Buddhism. *International Journal of South Asian Studies* 1, pp.53-75. 2008年. 査読有.

〔学会発表〕(計 2 件)

種村隆元. インド密教における carya の位置考察. 日本密教学会第 41 回学術大会. 2008年10月10日. 高野山金剛峰寺.

Ryugen Tanemura. Some Remarks on Buddhist Tantric Carya. International Conference on Esoteric Buddhist Studies. 2006年9月6日. 高野山大学.

6. 研究組織

(1)研究代表者

種村 隆元 (Tanemura Ryugen)
東京大学・大学院人文社会系研究科・助教
研究者番号: 90401158

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし

(4)研究協力者

Alexis Sanderson
Borden Professor of Eastern Religion and Ethics
All Souls College, Oxford

Harunaga Isaacson
Professor of Classical Indology in the Department of Indian and Tibetan Studies, Asien Afrika-Institut, Hamburg University